
彼は素材屋2 ~ヴァンダーリング騒動~

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼は素材屋 2 ～ヴァンダーリング騒動～

【NZコード】

N3148V

【作者名】

Rail

【あらすじ】

鍊金術に欠かせない鍊金釜が一つも割れた！？ 魔法あり鍊金術ありギルドありモンスターありドラゴンあり妖精あり！ そんなファンタジーな世界で活躍する鍊金術師クルトと王宮魔術師アーデルベルトの依頼を発端に、素材屋やその従業員、そしてついには女装王子まで巻き込んで、事態は意外な方向へ。

短編「彼は素材屋」の続編になります。前作を読んだ方が分かりやすいと思われます。

錬金術師、痛恨の失敗（前書き）

彼は素材屋の続編。 クルトが主役予定でしたが、色々あつてやつぱり恭一が主役に。

鍊金術師、痛恨の失敗

城下にある鍊金術師の工房からは、しばしば悲鳴や歎声が漏れ聞こえる。

工房の主は世界でも有数の実力を持つ鍊金術師なのだが、チャレンジ精神が旺盛でいつも新しいことに挑戦しては失敗と成功を繰り返しているためだ。

工房の主の名前はクルト。総白髪に眼帯という奇異な風貌の少年である。といつても、それを補つて余りあるベイビーフェイスと人懐っこさで、城下の女性と一部男性によつてファンクラブが作られるほど人気がある。

さて、今日はと言えば、かの鍊金術師の工房からは盛大な悲鳴が漏れ聞こえてきていた。

「なんつでなんだよ！」

クルトは工房で頭を抱えていた。

工房の真ん中に陣取つた黒々とした大きな鍊金釜は、ついさきほど綺麗に真つ二つに割れてしまつたのである。

63年モデルのシユテファン式鍊金釜。象が踏んでも壊れない、百年鍊成しても大丈夫、というのが謳い文句だ。壊れたという話は聞いたことがない。

鍊金術師であるクルトの大事な相棒だつたのだが。

「…………そんな無茶な鍊成をしたのかね、クルト」

頼んだものの進捗具合を確認しに來ていた王宮の魔術師アーデル

ベルトが呆れ顔で呟く。長い藤色の髪をかき上げながら、彼はつくづくと割れた鍊金釜を眺めた。

「綺麗に割れているな。お前のことだ、ヒビが入っているのに気付かずについ続けていたのではないかね？」

「んなこた！ ねえ、よ。……多分」

ふてくされた顔で言い返すクルトだが、語勢がすぐに弱くなつた。心当たりはなきにしもあらず。さらに言ひなら似たような前科がなくもない。昔馴染みのアーデルベルトには何かと知られたくないことをまで知られている。

「うつせえよ。魔法と違つて鍊金術は勢いつてのが大事なんだよ、勢いつてのが」

そっぽを向くクルトを見ながら、ここで反省を促すのが年上としての役割なのだろうかとアーデルベルトは一瞬悩んだが、それよりも先にすることがあると思いなおして説教を延期することにした。

「しかし鍊金釜が壊れてしまつたら鍊成もできないだろ？ 期日は三日後だ。できるのかね？」

もつともな指摘に、クルトは言葉を詰まらせた。

それを見たアーデルベルトが眉をしかめる。

「今回の依頼主が誰か、分かつているのだろう？」

腕を組んで厳しい表情をするアーデルベルトに、クルトはうめいた。が、唐突に彼は閃いた。

「まだ予備の鍊金釜が一つある！ それを使つぞ！ なら余裕で間に合つて！ さすが俺！」

「…………なりいのだが

何故かものすごく嫌な予感がしたアーデルベルトは、次善の策を考え始めたのだった。

そしてその予感はものの数十分後には的中することとなる。

王都の外れにある世界一の素材屋という看板がかかっただ店がある。ここに店主に頼めばこの世で手に入らぬものはない。魔法、鍊金術、料理、工芸など様々な分野の素材を、それがどんな貴重なものでも期日を守つてしまつかり調達してくれる評判の店だ。

その素材屋に一人の少年が騒々しく駆けこんできた。いわすもがなだが、クルトである。

「キヨーチキヨーチキヨーチ！ 大変だ！」

「俺は大変じゃない」

カウンターの奥で「レクションの整理をしていた店主キヨーチ二と恭一は視線を上げることなく言つた。

「俺は大変なんだって！」

唾を飛ばしながらカウンターへと突進していくクルトに、いつものことだとは思いながらも恭一は鬱陶しそうに一瞬だけ視線を上げて戻した。そして再び視線を上げた。人はこれを二度見と言つ。若いくせに総白髪というクルトだが、彼が髪を染めている姿を恭一は一度も見たことがない。

それがどうしたことか、現在クルトの頭は七色のアフロヘッドになっていた。しかも煌めくラメ付き。どう見ても変な人である。眼帯の代わりにヒゲ眼鏡でもかけたら宴会芸におあつらえ向きになるだろう。

「確かに大変だな、頭が。大丈夫か？」

「大丈夫じゃねーんだよこれが！」

「確かに。だが直す薬はないぞ」

「今必要なのは薬じゃねえんだ！」

「そうかもしけないな」

残念ながら突つ込み役が不在のために、二人の会話の齟齬を指摘する人間がいなかつた。

「どうか、

「クルトさん、ついに狂いましたか？ 隨分とおめでたい頭をしていますね。それとも大道芸人にでも転職したんですか？ お似合いですよ」

ゆらゆらと尻尾を揺らしながら便乗して毒を吐くのは自称恭一の一番弟子、人猫族の少年ルツツである。年齢的にはクルトの方が二つ三つは年上のはずなのだが、子供っぽい彼はルツツが絡んでくると必ず喧嘩を買ってしまう。いわゆる犬猿の仲だ。

「んだとこの留守番！ 喧嘩売つてんのか？」

「事実を言つたまでですが？」

クルトが睨みつけると、ルツツは冷笑しながらも尻尾の毛を逆立てた。

あわや乱闘が始まるかという雰囲気の中、おそばせながらアーデルベルトが店へとやってきた。

「キヨウチ、至急仕事を頼みたい」

すぐそばで火花を散らす年若い少年たちには田もくれず、アーデルベルトは疲れた顔で店主に話しかけた。

「63年モデルのシユテファン式鍊金釜と60年モデルのボニーファティウス式鍊金釜がある練成をしたら壊れた。代わりの壊れない鍊金釜の調達か、あるいは原因究明に助力願いたい」

「…………先にパーーマ直し薬とか調達してやろうつか？」

「いい、今は触ってくれるな……」

げつそりした様子でアーデルベルトは言う。彼の長い藤色の髪は、今やウケ狙いかと思つくらい強烈なパーーマがかかつっていた。縦口ールドコロカドレッドヘア に近い。

魔力と言うのは髪にたまると言われているため、王宮魔術師のアーデルベルトはいくら悲惨な髪型になろうとも簡単に散髪するわけにはいかないはずだ。

「とにかく、時間がない。クルトの練成の期限まであと二日しかないのだ。私の髪はその後に頼む」

悲壮な顔で言うアーデルベルトを不憫に思った恭一は、ようやく

話を聞く体勢になつたのだった。

ちなみに鍊金釜の持ち主であるはずの七色アフロはといえば、未だにルツツと口論をしていた。

「……あればどうする?」

恭一がクルトを顎で指して言つと、アーデルベルトは深くため息をついた。頭痛をこらえるようなしかめつ面でクルト達の方を振り返る。

「クルト、ここに何をしに来たのか覚えているのなら早々にその口喧嘩を止めることだ」

「ああ!?

喧嘩がヒートアップしていたクルトは眼光鋭くアーデルベルトを睨みつける。七色アフロなのでその迫力は半減していたが。

逆にルツツは一気に冷静になつたようで、アーデルベルトを見た後に顔を伏せて謝罪の言葉を口にした。落ち込んだようにべたりと耳を伏せる。

ルツツの肩が震えているのは怒りでもなく泣いているわけでもなく笑いを堪えているからだろうが、アーデルベルトは気付かないふりをした。人を指さして爆笑した奴よりはよほど礼儀正しい。

なにしろこの原因のクルトはアーデルベルトの頭を見た途端、自分の七色アフロを棚に上げて腹を抱えて笑い転げたのだ。

思い返して不愉快になつたアーデルベルトは未だ興奮状態のクルトに向かつて雷を落とした。魔法的な意味で。

二十代であるにも関わらず苦労性のせいか老成していると言われるアーデルベルトだが、存外大人げない面も持ち合わせているのである。

「……くつそ、アーデルベルト! 何しやがる!」

持ち前のしぶとさで復活したクルトが怒鳴る。あわや乱闘かと思われた時、

「おやおや、クルトさんもアーデルベルトさんも髪型を変えられたんですか? 素敵ですね~」

店の奥からのんびりとした声がかかった。

「トニーさん、本気ですか？」

帳簿整理から戻ってきたトニーは、ルツツの質問にきょとんとした顔で首を傾げた。

「え～？ 個性的で素敵じゃないですか～？ 僕も髪を伸ばしたら挑戦してみたいですね～」

本人の性格同様ふわふわとした天然パーマの金髪をトニーが触る。

「止めるトニー。お前のファンが泣くぞ」

「またまた、何言つてるんですか、キヨイチさんつてば～」

トニーはころころ笑う。

天然つて怖え、と恭一は思った。トニーがそういうた暴挙に及んだ場合、ファンクラブのハッピングが彼に向つてくることは想像に難くない。負けることはなくとも、精神的に参る。

「あー……仕事の話だつたな」

すっかり毒気が抜かれたのか、クルトはぱづが悪そうにしながらも本来の目的に話を戻したのだった。

ヴァンダーリング

初めて聞く単語に、恭一は目を輝かせた。

「ヴァンダーリング？ なんだそれ」

俄然興味をもつたらしい恭一にアーテルベルトは苦笑した。

「ヴァンダーリングというのは」

「身につけると体が痩せる指輪だぜ！ ただし練成がめっちゃくちや難しいから、作れるのは俺みたいな凄腕の鍊金術師だけだ。すげーだろ？」

アーテルベルトが言いかけたのをクルトが割り込む。

「女性が喜びそうな指輪だな」

クルトの露骨なアピールをさらつと流した恭一は、指輪の効果に感心した。

このファンタスティックな世界においても、女性は痩せている方が美しいという風潮がある。といつても、恭一がかつていた日本でいうところの標準体型ぐらいが理想とされている。過分に痩せた女性は食事もままならぬ貧乏人と見られるためだ。

なんにせよ、そんな指輪があるのならば、日本や某肥満大国に売りさばけばさぞや大儲け出来ただろうなあと思つた恭一だった。

そんな恭一の考えを見透かしてか、アーテルベルトがしかつめらしい顔で言つ。

「キヨウチ、勘違いをしてるようだが、痩身効果が出るのは魔法で太った場合のみだぞ」

「は？」

言われた意味が分からず恭一は首を傾げた。

「ああ、あの指輪なんですね～」

「あれは鍊金術でできるものだったんですね」

恭一とは反対に、トーヤルツツは合点がいったとばかりに頷いた。

「ああ。事情が事情だ。あまり公にはしたくない故にクルトに秘密

裏に頼んだのだが……」

「ちょっと待て。確認させてくれ」

うつかりおいてけぼりにされそうな気配を察した恭一は慌ててス

トップを掛けた。

「その指輪って有名なのか？」

「なんだよキヨーチ、そんなことも知らないのかよ。だっせえ」

クルトが笑う。

「悪かつたな、物知らずで」

誰しも知っているようなことを知らなかつたとはとんでもない失

態である。好奇心旺盛で知りたがりな恭一は仏頂面で言う。

「マスターはこの世界で育つた方じやないんですよ。知らなくとも仕方ないでしょ」

「子供のころに読むような童話だからな。知らなくても不思議ではない。大人げないぞクルト」

ルツツとアーデルベルトが恭一を庇う。クルトは一向に悪びれた様子もなく椅子の上でふんぞり返っている。

青筋を立てたルツツが腰に佩いた剣の柄に手を掛けたが、「ロマンチックなお話なんですよ。意地悪魔女と金のエルフの王子様っていう童話なんですよ。今でも人形芝居の演目としては人気で、ほら、この前キヨイチさんが女の子をテートに誘おうかって言つてた人形芝居がそうだつたじゃないですか？」

トニーの言葉に空気が凍つた。フリー・フォールも真つ青な速さで周囲の体感気温を氷点下にまで落としたブリザードの発信源は恭一である。トニーの空気の読まなさっぷりは時として窮地を救い、時として地雷を踏みぬく。

その場に居た面々には恭一からカビやキノコが果てているような幻覚が見えた。体感気温は氷点下なのに空気はじめじめしている摩訶不思議。

「ははは、そういうこともあつたなあ」

恭一が言つ。顔が笑顔なのに目が死んでいる。

「バー・バラちゃんを評判の人形劇に誘おうと思つたらどつかの誰かさんにチケット取られた挙句にバー・バラちゃんも取られちゃつたんだよなあー、あつはははははー。」

空虚な笑い声が店内に響く。心当たりのある一名は思わず目をそらした。

「……ごめん、俺ちょっとロッケンタールの湖の底でたそがれたい気分になつたからちょっと出かけてくるわ」

「わ、悪かつた！ 謝るから止めてくれキョーチ！ 悪かつた、俺が悪かつたー！」

立ち上がり店を出て行こうとする恭一にクルトがしがみつく。かのロッケンタールの湖の底に行かれてしまつては、クルトの年収一年分が軽く吹つ飛ぶくらいの特上の護衛を雇わなければ迎えにもいけない。そもそも店にいないときの恭一を捕まえるのは至難の業だ。

「はーなーせ！ 彼女いな歴がそのまま年齢の俺の気持ちがお前らみたいなイケメンに分かつてたまるか！」

魂の叫びに思わず全員が顔をそむけた。恭一の顔立ちは日本でもこの世界でも可もなく不可もなくという評価である。つまりモテる要素はない。逆にここにいる恭一以外のメンバーは女性に言い寄られることが日常茶飯事という世の男性にとつては目上のたんこぶ的 existence である。

恭一も決して性格や顔が悪いわけではないのだが、こちらの世界ではいかんせん純粋に運が悪い。彼の周囲にやたらと美形が集まるため、大抵の女性の好意はそちらに向かうのだ。

「分かった、今度可愛い子紹介するから！ なんなら惚れ薬も練成してやるからー！」

「そんな紛いものの愛は欲しくねえんだよ！ 俺は運命の出会いを求めてんだよ！」

その上無駄に本人がドリーマーなせいもあって彼女いな歴は継続中である。人生に肝要なのは諦めと妥協だと彼が気付くのはいつ

の日か。

結局、世界中のカツプルの仲を引き裂いてくると言つ恭一を宥めることに成功したのはその十分後だった。

さて、話は本題に戻る。

「意地悪魔女と金のエルフの王子様というのは、魔女の呪いによってエルフの王子の婚約者が醜い姿に変えられてしまうという話だ。魔女の呪いはいかな魔法使いも解くことができず、エルフの王子は様々な苦難を経たのちに、唯一呪いに打ち勝つ魔法の指輪を手に入れて魔女の呪いを退けるという筋書きになつていて」

アーデルベルトが真面目くさった顔で説明する。

「魔法の指輪とは言つているが、元の指輪は鍊金術でないと生み出せねえんだ。それに魔法を付与して完成する。作り方が載つてゐる本は世界に数冊しかないような稀観本ばかりだ」

クルトが補足した。

異世界からの渡来人である恭一には全て初耳の話であるが、おとぎ話というのはどれも似たようなものだなと思つた。

「どうか、話の流れから推察すると、

「呪いで醜い姿について、もしかして呪いで太つたのか？」

するとアーデルベルトが重々しくうなずいた。

「ああ。エルフは特に体のラインが崩れることを嫌う。老化以外ではなく。ゆえに苦労をしてでも、呪いを解く必要があつたというわけだ」

「普通にダイエットしたらいいじゃん

じ」「くもつともな考え方だ。

「それが出来たらわざわざ王子が苦労する必要ねえだろ。節食しうが絶食しようが徐々に太る、そういう呪いだつたんだよ。俺だったら絶対ごめんこうむるね！」

クルトが恐ろしそうに身を震わせる。女好きのクルトは人一倍容

貌には気を使う伊達男なのである。

チエリーパイを誰かに食わせとけよ、と恭一は思ったが口にしなかつた。異世界では通じないジョークだ。

「心配しなくとも普段からだらしない生活をしているクルトさんなら、そのうち自然と太るんじゃないですか？ その髪型で太つたら人気のピエロになりますよ」

ルツィが鼻で笑う。

「うるせえよ留守番が！ 喧嘩売つてんのか！」

「なんでしたらクルトさんの月収一月分で買っていただけますか？」
またもや喧嘩を始めようと/orする一人に、それぞれの保護者一人がため息をついた。

アーデルベルトが恭一は視線を交わす。恭一はうなずくと、

「二人とも『静かにしろ』『大人しくしろ』」

問答無用の超強力魔法に、つるさい二人はなすすべもなく声と体の自由を奪われる。

その様子を確認した恭一は長くため息をついた。

「で、今回はその指輪を練成しようとして何故か鍊金釜が壊れたつてわけだ。原因は分かつてないんだな？」

「ああ。クルトも頭を抱えていた」

「ふうん。以前に練成した人は？」

「現在手を尽くしているが、文献以外残っていない」

恭一は顎に手を当てて考え込んだ。

クルトは見た目や態度は幼いが、鍊金術にかけては天才的な才覚と知識がある。そのクルトが分からないのであれば、それは相当な難題だろう。恭一は鍊金術を究めるつもりはまだないので、そちらの方面は明るくない。ならば自身の得意分野から攻めるだけだ。

「とりあえず鍊金釜の調達だな。今回壊れた鍊金釜つてのはなんだつたつけ？」

恭一は『カタログ』と書かれた本を手元に引き寄せながら尋ねる。

この『カタログ』には、彼が今までコレクションした物の記録が

記されている魔法で作られた本だ。備考として恭一の収集した情報も書き込まれている。見た目は豪華な装丁の本だが、中身はパソコンのようにデータベース化されており、四次元本とでも言つべき仕組みでページ数が無限に増やせる。情報量はちょっとした図書館レベルである。パソコンの形にしても良かつたのだが、それではロマンがないと思つた恭一があえて本という形にしている。

「63年モテルのシユテファン式鍊金釜と60年モテルのボーファティウス式鍊金釜だ」

「了解。えーっと、『鍊金釜』を『強度別』に降順に並び替えっと……」

恭一が本を開くと、ページが独りでにめくれ始めた。そしてページが発光し、恭一しか読めない字が浮かび上がった。

しばらくそれを読んでいた恭一だったが、鼻の頭をかくと本を閉じた。

「えーっと、知恵の蔵知恵の蔵」

恭一は本棚にある『知恵の蔵』と書かれた本を取り出す。

「こちらは恭一が今まで見聞したことを記録した本で、こちらもやはり中身はパソコンよろしくデータベース化されている。

「そうだな……キーワード検索で『鍊金釜』、関連度の高い順で……絞り込み検索で……」

このファンタジー世界において、現代日本のデータベースの概念はない。そのため他の面々は恭一が言つてすることは何となく分かるものの、どういう仕組みなのかはよく分からなかつた。この技術を教えてくれと再三色々な人間から言われているが、恭一は黙秘を貫いている。沈黙は金、情報も金だ。

「あ…………お？」

眉を寄せて文字列を追つていた恭一だったが、やがてある項目を見つけて表情を明るくさせた。

「…………いい知らせと悪い知らせがあるがどちらにする？」

「いい知らせ！」「悪い知らせから頼む」

恭一が魔法を解いたためにクルトも元気よく意見を主張したが、「じゃあ悪い知らせから」

「俺の意見は無視かよ！」

「俺の意見は無視かよ！」

クルトが吼える。恭一はクルトを一瞥して肩をすくめた。

「俺はアーデルベルトから依頼を受けた。アーデルベルトの意見を優先して当然」

「ちえつ」

クルトがふくれつ面でカウンターに突っ伏する。その子供じみた仕草にアーデルベルトはため息をついた。彼はこの性格のせいでいまいち王室の重臣たちからの信頼が薄いのだ。なんだかんだで彼の世話役を押し付けられているアーデルベルトからすると、その点が惜しい。

「悪い知らせだが……俺はクルトの持つてた釜以上の強度の鍊金釜を知らない。丈夫さで言えば、特に63年モデルのシユテファン式鍊金釜に比肩する鍊金釜は皆無と言われてるらしい。クソ高いけど買い直した方がいいんじゃないか？」

その言葉にクルトがうめいた。プロ御用達の鍊金釜は、庶民の家を数軒購入可能なほど高価である。

「で、いい知らせだが、鍊金釜が壊れたこと原因らしきものの候補がいくつか見つかった」

「ほう。何だ？」

アーデルベルトは身を乗り出す。クルトも体を起こした。

「鍊金釜が壊れる原因にはいくつか系統があるんだが……よくあるのは老朽化、耐久度の低下だ。要するに寿命だな。あと物理的に壊れた場合。高いところからおつことしたり、大規模な爆発に巻き込まれたりした場合に壊れる。これはまれだな。で、後はこれ以上にレアケースがほとんどなんだが」

恭一が指を動かすと、いくつもの文字が空中に浮かびあがり、皆に見えるように整列する。この文字は公用語なので、クルトやアーデルベルト達にも読むことができた。

「俺は鍊金術については詳しくないが、クルトなら分かるんじゃないか？」

その言葉に奮起したクルトは、目を血走らせながら文字列に目を走らせた。

そして数分後、

「最悪だ…………！」

クルトは再びカウンターの上に突っ伏した。

「どうした」

嫌な予感を覚えつつアーデルベルトが尋ねると、クルトは突っ伏したまま返事をしない。

「おい、クルト」

恭一も声をかける。

と、クルトが緩慢な動きで顔を上げた。

「……鍊金釜が壊れたのは、組み合わせが悪いからっぽい」

「組み合わせ？ 材料が違っていたのか？」

アーデルベルトが眉をしかめた。しかしクルトは首を振る。

「材料というか……多分、姫に原因があるっぽいというか……」

クルトには珍しく歯切れが悪い。ついでに言うなら彼の顔色も悪かつた。そしてそれを聞いたアーデルベルトの顔色も悪くなつた。

「姫つて……テオか？」

「あれは一応王子だつつの」

恭一の発言にクルトが突っ込みを入れる。某女装王子が本日は不在のため、彼の不敬な発言を咎める人間はいなかつた。忠誠心の薄い臣民たちである。

深くため息をついたアーデルベルトは、眉間にしわを深くしながら言つた。

「キヨウチ、ここから先は他言無用で願いたい

「おう」

その瞬間、世界中の魔法使いが束になつても解けないであろう防音結界が恭一の店に張り巡らされたのだつた。

なんだかんだいいつつも、恭一は冒険や厄介事に首を突っ込むのが好きなのである。面白そうないと限定だが。

問題解決

さて、現在恭一が滞在している王国には、何人かの王子王女がいる。恭一と近しいのは女装王子ことテオだが、その他にもすでに国外に嫁いだ王女もいれば、国内で貴族の娘と結婚して王の補佐をしていたりと様々だ。

現在ハイティーンのテオが末の王子ということから容易に推察できるように、王子王女というのはすでにみんな結構な年齢だつたりする。上はすでに三十路を迎えているそうだ。王妃一人で全員産んだのだから大したものである。

話は逸れたが王子王女の年齢だ。

この世界では一般的に、貴族は二十歳を迎えるころには婚約者が決まっていることが望ましいとされる。特に女性の場合、二十歳を超えてしまうと嫁の貰い手が一気に減ってしまうらしい。ゆえに恭一が良いなと思った美人貴族は大抵婚約者がいるか結婚しているという不遇があるのだがそれは別の話。

とかく結婚の早い貴族女性では、二十五を過ぎたら完全にいかず小母扱い、もしくは売れ残りと判断されてしまうわけだ。王族も例外ではない。

ところがどっこい、現在テオの姉に当たる王女は、今年で二十五を迎えるというのに未だに独身なのである。恋人はいない。婚約者も当然いない。

「ハイデマリー姫には少々性格に難があるので。それゆえ嫁ぎ先が見つからず、本人も焦っていなかつたというのもあって今まで未婚のままでいたのだが、つい先月に南方の国の王族が姫を見初めて、婚約を申し込んできた」

苦虫をかみつぶしたようにアーデルベルトが言つ。

「へえ、そりやめでたいな」

恭一は感心して言う。肖像画で見た感じ、国王夫妻は美男美女。テオもかなりの美人だし、件のハイデマリー姫も相当な美人だろうと思った。外国人間が一目惚れをしてもおかしくないだろう。

「たださー、その南方の王族つてのが結構な遊び入らしいんだよ。ハイデマリー姫に惚れる前はあっちこっちの王族に粉掛けたって話だ。それは構わねーんだけど」

「いいのかよ」

恭一は思わず突っ込んだ。しかしクルトは気にせず続けた。

「粉掛けられてた女が結構本気になつてたらしくってな。王子の婚約者であるハイデマリー姫に呪いをかけた。それが

「太る呪い、つてことか」

恭一の言葉にクルトとアーデルベルトが疲れ切つた様子で頷いた。特にアーデルベルトの落ち込みようがひどい。

「姫を見初めてくれるような人間など滅多にいないだろう。ようやく、ようやく嫁いで下さると思ったのだがな……」

苦悶に満ちた声は、彼の不遇を物語るようである。なんとなく聞いたら愚痴が長くなりそうなので恭一はスルーしておくことにした。

「それで、クルトの言う問題つてのは?」

恭一が水を向けると、クルトはひどい顔で笑つた。

「指輪を鍊成する時には姫さんの血を使うんだけど……」

「クルトは手で顔を覆つた。

「あの戦闘狂の筋肉姫が……！」

七色アフロが震える様子はかなりユーモラスであつたが、恭一は場の空氣を読んでシリアスな表情を崩さなかつた。

「あ〜、もしかしてハイデマリー姫つて、南方の格闘大会で優勝された方ですか?」？ 国王陛下に似てましたし、気品ありましたもんね~」

トニが思いついて言えば、クルトとアーデルベルトはぎくりと体

を強張らせた。

「え？ 優勝したのはハインリヒって奴だろ？ 筋骨隆々の大男だつたぞ！」

恭一が驚いて訂正する。痛いのが嫌いな恭一は、格闘大会に参加こそしなかつたものの慰安旅行がてらにトニーやルツツたちと見物には行っていたのである。

「え？ キヨイチさんも彼女とすれ違つたじゃないですか？」 ルツツ君も見ましたよね？」

と、トニーがルツツを見る。ルツツは眉根を寄せて不本意そうではあつたが頷いた。

「見た目では非常に分かりづらかつたですが……女性だつたと思します。見た目が男性なので男性名を名乗つていると思つていたんですけど……」

「嘘だろ？」

恭一は目をむいた。

「だつて、こんな感じだつたぞ？ 大会の後に女の子から告白されまくつてたぞ？」

空中に恭一の知るハインリヒの全身像のホログラフィーもどきが浮かび上がる。魔力が有り余つている恭一は割とこういう無駄なところに魔法を使う。

さて、件のハインリヒはといえば、身長は一メートル八十センチを超える長身で、プラチナブロンドの髪を短く刈り込んでいる精悍な顔つきの美丈夫だつた。言われてみれば国王に似ていなくもない。体格で言つと筋骨隆々と言う表現が相応しく、むき出しの腕は松の根のように筋肉が盛り上がり、長く伸びた足は丸太のように太い。鎧ではなく武闘家のような格好をしており、チャイナ服のような緑色の上着と薄茶のズボン、革のブーツを履いている。服の上からでも分かる盛りあがつた胸が女性の象徴に辛うじて見えなくもないが、九割九分の人間は胸筋だと思うだろう。

「クルト、アーデルベルト。こいつ男にしか見えないよな

恭一が尋ねるが、何故か一人は冷や汗を流して明後日の方に向へと目をそらしていた。

「…………おい」

恭一は果てしなく嫌な予感を覚えて尋ねた。
「まさか、本当にこの男にしか見えない奴が……」

「…………ハイデマリー姫だ」

アーデルベルトが絞り出すように言つ。

一瞬黙り込んだ恭一は、ハインリヒ改めハイデマリー像を見て、再びアーデルベルトたちに視線を戻した。眉間に深い皺を刻む。

「これ、性格どころか容姿がアウトだろ。っていうかこれ男だろ。実は染色体XYだろ。血液検査しとけマジで」「性格にも難があるのだ」

「駄目駄目じやねえか！ 格闘家の姫つつたらアリーナ姫みたい

なのがせいぜいだろ。筋肉達磨の上相手の返り血浴びて高笑いする奴が姫だつて分かるかボケ教育係に責任取らせん」

「教育係はとっくの昔に逐電している」

アーデルベルトは諦観のにじむ声で言つ。

「ちなみにアリーナ姫とは誰だね」

「壁をぶちぬくお転婆姫だ」

よく考えたら城の壁をぶちぬく女をお転婆程度で済ませて良いものか。

それはともかく他人事ながら恭一は不機嫌になっていた。お姫様という幻想を見事に壊されたためのハツ当たりでもある。そしてハイデマリーが男の自分よりも可愛い女の子にモテていたことに対する僻みもある。

「もしかして、南方の王子の方はあの大会で姫に好意を持たれたんですか？」

ルツツが尋ねると、アーデルベルトは疲れ切った顔で頷いた。

「格好良かったですものね~」

「対戦相手を血で真っ赤に染めていましたね」

トニは「コニコニ笑うが、相槌を打つルツツの顔は微妙に引きつっている。ちなみに恭一やルツツはハインリヒ改めハイデマリーのオーバーキルつぶりにどん引きした口だ。会場でたまたまされ違うことになつたとき、恭一などは内心逃げたくてたまらなかつた。

「くそつ、あんな肉食系が姫だなんて俺は認めたくない……」

恭一は拳を握りしめた。彼の中でお姫様に対する幻想が木端微塵になつていた。

「蓼食う虫も好き好きってことだ。お前の嫁になるわけじゃないんだから流せよキヨーチ」

あまりの恭一の荒れつぶりにクルトが呆れて言つ。先ほどの自分の態度のことは忘れたらしい。

恭一も一通り感情を吐き出して気が済んだのか、気まずそうに居住まいを正すと実物大ハイデマリー像をかき消した。

「それで、鍊成が失敗した理由はなんだっけ？」

恭一が尋ねると、クルトも腹をくくつたのか正直に言つた。

「鍊成材料の中には『乙女』でないと相性が悪いもんが入ってるんだ。ユニコーンとかいろいろな」

「確かに見た目からして乙女じゃないもんな」

恭一は力強く頷いた。そんな恭一の様子にルツツは何かを言いかけて止めた。どの道何を言つてもハイデマリーに対する不敬だ。

「や、そつちじゃなくて、業の方」

合点がいったのか、アーデルベルトが頭を抱えて呻いた。

「姫は戦いが好きなんだよ。で、あんまり人間を傷めつけたり殺したりすると、体内に業がたまる。普通の女の子なら平氣なんだが、姫のはけた外れにたまつてゐる可能性が高い。だから材料同士が反発を起して鍊金釜が壊れた」

「ふうん」

恭一は腕を組んだ。業といつるのは日本で言つ穢れのようなものだろうと推察する。

「王族の姫さんなら禊ぎぐらいしてそうなもんだが」

「ハイデマリー姫が面倒くさいと嫌がるのだ」

「んでもって清めた端から返り血浴びるんだよあの人」

「駄目駄目だな」

恭一は呆れ切つてため息をついた。

「んじや、新しい鍊金釜調達して姫さんの血を清めたら万事解決だな」

「ああ、そうだな。で、キヨウチに頼みがあるんだが」

クルトはカウンターに身を乗り出した。恭一は身を引く。

「強力な聖水と63年モデルのシユテファン式鍊金釜の調達を頼む。特に聖水は魔王にも使えるくらい強力な奴、一日以内で。経費はこいつ持ちな」

と、アーデルベルトを指さす。

「待て、クルト。聖水はともかく鍊金釜が壊れたのはそちらの事前調査不足だろ?」

「違うね。元は姫に業を溜めた状態でいさせた王宮側の手落ちだろ。俺は二つも鍊金釜壊されたんだぞ? 商売あがつたりだ! それぐらいくつべくべ言わずに出せよな!」

一人が醜い争いをしている間、恭一はコレクション用の本から担当ページを見つけ出していた。マジックスマーケを煙らせながら商品を取り出す。

「んー、アーデルベルトには普段から世話になつてゐるしな。今回は格安で売つてもいいけど」

そう言って恭一は超強力な聖水をカウンターの上に置いた。

「鍊金釜は重いからクルトの工房に届けるとしてー、合計でこれくらいだつたらどうだ?」

そう言って、恭一は売値をアーデルベルトに提示した。市場価格の70パーセントオフという破格の値段だ。

「感謝する。ぜひその値段で頼む!」

どこか血のにじむような声を聞き、恭一は中間管理職の悲哀を感じた。

大体クルトのしでかしたことの尻ぬぐい役はアーテルベルトである。さらに言つうならしおつちゅう市井にまぎれて遊び回る女装王子のお守り役も彼である。気苦労が多いのでそのうちハゲるのでは、と恭一はひそかに心配していた。

「あとは……お、最後の一個だな」

恭一は青味がかつた薬瓶を取り出した。

「これはアーテルベルトにおまけ」

「何だね？」

質問に答えるより早く、恭一はその薬瓶の蓋を開けると中身をアーテルベルトの頭に振りかけた。

「五分置いてから櫛で梳け。そのドレッジが直る」

「……重ねて感謝する」

感極まつた様子でアーテルベルトが言つ。

「キヨーチ、俺のは！？」

「自分で鍊成しろ」

素氣無く恭一が言つ。

「ずつりい！ なんだよその差は！」

クルトが不平を鳴らすが、恭一は気にした風もない。

「田の行いの差だ。優遇してほしけりや、うちでの喧嘩をするのは止めろ」

「うつ、それはこの留守番も悪いだろー」

大人げなくクルトがルツツを指さして喰く。恭一はやれやれと肩を落とした。

「そうだな。そしてお前も悪い」

恭一の言葉にクルトは口をつぐんだ。ルツツもしょんぼりしている。

しかしここで反省しても次に活かせないのがこの「一人だ」ということを恭一もアーテルベルトも身をもって理解していた。保護者は大変だ。

この辺の共通点が恭一がアーテルベルトに甘い理由でもある。

さて、その後ヴンダーリングの完成を見届けた恭一は、自身のコレクションであつた超強力聖水を補充しに行くべく旅に出た。ルツツは例のごとく例によつて留守番である。

かの聖水は世界一高い靈山の頂上付近の泉で取れるのだが、恭一はその帰りに魔法で機体を作つて一人鳥人間コンテストをしてハーピーに振られたり、着水したついでに魔法を使って海底旅行に切り替えて人魚に振られたり、はたまたそのまま突き抜けて地中に傷心旅行へと旅立つたりと大忙しだった。

そういうわけで、ルツツからの緊急コールで店に帰つた時には件の依頼から一週間以上経過していた。

いきなりプロポーズ

切羽詰まつた押し掛け弟子の様子に大急ぎで戻ってきた恭一は、すっかり憔悴した様子のルツツに目を瞬かせた。

「ルツツ、何があった？」

いつもなら元気な尻尾もだらりと垂れ、オレンジの毛もつやがなくなっている。目にも輝きがない。

「じ、実は、ここ数日マスターにお客様がいらっしゃってたんですが……」

「キヨウイチが帰ってきたというのは本当かえ！？」

息をせきつて女装王子ことテオが駆けこんでくる。

普段ならば完璧メイクの崩れないプラチナブロンド縦ロールのはずの彼が、目の下のクマ隠しもできていない、髪も乱れている状態である。ドレスも皺が目立つ。その尋常でない様子に恭一は嫌な予感を覚えた。

「どうしたテオ。緊急の依頼か？」

「そ、そのようなものじゃ……」

肩で息をするテオに、トニーが慌ててお茶を出す。少しづるいそれを一気に飲み干したテオは、恭一の肩をがつしりと掴んだ。

「キヨウイチ、そなたは、ハイデマリー姉様と話したことがあるのかえ？」

連日寝不足なのか血走った目をしているテオに若干引きながら恭一は頷いた。

「格闘大会の時に一言一言交わしたと思うが、それがどうかしたのか？」

恭一はハイデマリーと遭遇した時のこと思い出しながら囁つ。確かにそれ違いざまに何故か褒められたので、精一杯格好をつけて謙遜しておいたはずだ。大会で可愛らしい女の子から黄色い声援を浴びていた男に対するせめてもの対抗心だった。哀れである。

テオは土氣色の顔でうわ」とのよつて言つた。

「姉様が、南方の王族との婚約話を蹴つた」

「はあ？」

「言われたことが理解できず、眉をしかめる。

「行かず後家のを貰つてくれるつてんだろ？ 何が不満だつたんだ？」

「そ、それがじやな、いいか、よく聞くのじやキョウウイチ」

低い声音でテオが言つ。その迫力に思わず恭一は唾を飲む。

「姉様は、結婚相手にお主がよいと指名された」

恭一の思考が一時停止した。

結婚相手とは何か。指名とは何か。チエンジは可か？ そもそもこの国は同性での結婚は〇×なのか？

ハイデマリーが女であるという事実をすっかり忘却している恭一である。

そんな彼の思考を断ち切つたのは、雄々しい足音だった。てつくりしょっちゅう彼を冒険者にならないかと誘つてくるヴォルフかと思ったが、入口に見えた人物を見て絶句した。

「テオ、キョウウイチ殿から手を離せ」

男にしてはやや高いが、女にしては低すぎる声が店内に響く。腹の底から出ているのか、無駄に響く。見かけは男、性別は女という噂のハイデマリーだ。

ルツツはハイデマリーの姿を認識した途端、物陰に隠れてしまつている。よほど怖い思いをしてきたらしい。

唯一トニーだけが平時と変わらぬ様子だが、トニーの評価ほど同じにならないものはないと先日の一件で恭一は再確認したばかりである。ハイデマリーはカツカツと靴を鳴らして恭一に近づいてくる。テオは慌てて恭一から離れると、ハイデマリーに場所を譲つた。

「キョウウイチ殿」

ハイデマリーは未だ事態に頭がついていない恭一の手を取ると、ひざまづいた。

ちなみに本日のハイデマリーの服装は貴族の子息といった感じである。服の上からでもその逞しい肢体がわかるが、高そうな服に負けない気品漂つている。町でナンパをすれば、庶民の女性から貴族の女性まで百発百中を狙える色氣もある。ありていに言うと非常にいい男っぷりだった。さうに言つたらまかり間違つても女性には見えない。

「唐突な申し出で済まない。貴殿に結婚を申し込みたい」
まさかのプロポーズに恭一は氣絶しかけた。

非常に美しい女性からのプロポーズである。ただし女性的な美しさではない。恭一の人生史上初めてのことだが、何故かちつとも嬉しくない。原因は言つまでもないが、気分的には男に告白された気分である。しかも自分よりイケメン。宝塚とかいうレベルを超えて、これは普通に男にしか見えない。

「わ、悪いが……」

男はちょっと、と言いかけた恭一は口をつぐむ。

ハイデマリーの斜め後ろにいるテオが、殺氣のこもった目で恭一を見んできているからだ。その顔には『姉様の乙女心を踏みにじつたら殺す』と書いてある。見た目からして漢であるハイデマリーのどこが乙女か。

しかし恭一が皆まで言わずとも彼女は察したらしい。陰のある表情を見せたがそれは一瞬のことだ、すぐに男らしい笑みを見せた。
「そんな顔をしないでほしい。いきなりの申し出で受けてもらえるとは思っていない。だが、私も諦めが悪いものでね。必ずキョウウイチ殿を振りむかせてみるよ」

普通の女性に言われたならば恭一は歓喜しただろうが、なにぶんハイデマリーは見た目男性である。恭一からすれば男に迫られていのようにしか思えない。しかも屈強な男達を血祭りに上げる狂戦士である。

かなり怯え気味の恭一の予想と反し、ハイデマリーはそれだけ言うと爽やかなイケメンスマイルを浮かべて退去の挨拶をして颯爽と

帰つていつた。

肩すかしをくらつた恭一はしばし呆気に取られたのだった。

つまらぬやうにひるむ

「つまりどうじだ？」

恭一は残ったテオとルツィに尋ねる。何がどうなつてこいつなつたのかさっぱり見当がつかなかつた。

テオはどこか憔悴した様子で恭一を見る。

「キヨウイチ、お主心当たりがないと叫ぶのか？」

「ない。全くない」

きつぱりと恭一が言い切る。

嘘をついていないと分かつたのだろうテオはじとつとした目で恭一を睨んだが、やがてやれやれといった調子で教えてくれた。

「キヨウイチ、お主格闘大会の直前にアルタートウムドラゴンを退治したそうじゃな」

「アルタートウムドラゴン？」

恭一が首を傾げる。テオは信じられないといった顔で恭一を見た。「知らぬのか。古代種のドラゴンじゃ。見た目こそ大人しいが、人を食らい、羽に毒を持つ」

「古代種のドラゴンねえ」

恭一は首を傾げた。格闘大会前後にそんなことがあつたろうか、と。

そこにルツィがあずあずと口を開いた。

「あの、マスター。それは恐らくマスターがフシギバナと呼んでいた生き物のことではないかと」

「……マジで？」

恭一が絶句した。大会の時の記憶がまざまざとよみがえる。

そう、確かに恭一はアルタートウムドラゴンを倒していたのである。本人はそれをドラゴンだとすら認識していなかつたが。

アルタートウムドラゴンといつのは、体長1メートル程の青っぽい皮膚のドラゴンである。ドラゴンの割に擬態して獲物をおびき寄

せるといつ類性をもち、その背中にはラフレシアのような巨大な花と葉がある。といつてもそれは毒を持つ羽の擬態であり、短時間であれば空を飛ぶことも可能だ。以前はたくさんいたという話だが、現代では超がつくほどの希少種。つまり知っている人間が少ない。ゆえに恭一も知らなかつたのだ。痛恨のミスである。

「心当たりがあるようじやな」

テオが我が意を得たりとばかりに頷く。恭一はいささか面白くなさそうな顔をしたが、沈黙を貫いた。

「あのドラゴンはひどく凶暴で腹を空かしている個体であれば人を襲つて食らう。しかしドラゴンゆえ強くてな。腕に覚えのある傭兵でも十人近くはいないと退治は難しい。お主がおらねば格闘大会どころか辺りは血の海の大惨事もありえたじやろ?」

発覚した衝撃的な事実に恭一は再び絶句した。彼としてはポケモンにそつくりなモンスターが襲つてきたので退治して保存魔法をかけた上でコレクションにした、くらいの認識だった。

世界一と名乗るぐらには超越した実力を持つ恭一だが、元々強かつたわけでも修行して実力で強くなつたわけでもないので本人は意外と臆病である。特に自己防衛については十重二十重に魔法をかけるほどのチキンっぷりだつた。その防衛魔法にかれれば町のチンピラだろうが屈強な戦士だろうが古代種のドラゴンだろうが等しく行動不能になつてしまふ。そのため恭一には相対的な強さがいまいち分からぬのである。

「別に人助けのためにやつたわけじゃねえし」

微妙に照れながら恭一がそっぽを向く。そしてふとハイデマリーと会話をした時のことを思い出した。

決勝の前のことだ。準決勝が終わり、決勝までしばらく時間が開いてしまうため、恭一達は物珍しいコロシアムの中をうろうつろしていた。いつでも恭一についてこようとして来るルツツと、置いてい

くと間違いなく迷子か誰かに連れて行かれそうなトニも一緒にいる。通路の向こうから歩いてきたハイデマリーに気付いたルツィがぴんと尻尾を強張らせた。準決勝でのハイデマリーの活躍をしつかり見てしまったルツィは咄嗟に恭一の背後に隠れていた。実を言うと恭一もどこかに隠れたかったが、ルツィが背中にいる上、ハイデマリーの周囲にはファンらしき女性がたくさんいた。下手な動きをするのも格好悪いと見栄を張つてしまい、背筋を伸ばしてそのまま歩く。トニはいつも通りだった。彼の天然っぷりはある意味驚嘆に値する。

さて、いよいよハイデマリーと恭一達がすれ違うと言つ時、彼女の視線が恭一を射た。思わず足を止めた恭一に、周囲の女性のことを見一顧だにせずハイデマリーはこう声をかけた。

「貴殿は相当の実力者とお見受けする。この大会に出場すれば優勝も狙えるだろう。何故出場されないので？」

真摯な問いかではあつたが、なにぶん状況が状況だった。ハイデマリーの周囲の女の子は、恭一に対してもう切もぎな眼差しを向けている。何しろ恭一の見た目からしてハイデマリーに負けている。体格でも顔でも。

「ここで引いたら男がすたる、と恭一は精一杯クールな表情を作つて言つた。

「俺は自分が強いとは思わないし、自分の力をひけらかすつもりはない」

ともすればハイデマリーが自意識過剰の目立ちたがり屋だという批判にも取れた。そのことにいち早く気付いた周囲の女性陣から殺気が飛び、恭一は内心で自分の言葉のチヨイスの悪さに泣いた。本当は単に、自分の力は自称神様から貰つたギフトであつて自分の実力ではなく、ゆえに自慢するようなものじやない、と言いたかつただけなのだ。

「……そうか」

ハイデマリーは意味深に呟くと、ふつと笑つた。

「いつか貴殿と手合わせできる」と願つている
「ご免被る」

内心ではかなりビビリつつ僻みつつ、恭一は素っ気なく言つてその場を離れた。彼に続いてルツツが一礼して離れた際とト一がにこやかに別れの挨拶をした際に黄色い歓声が上がったことに若干恭一がふてくされたのは言うまでもない。彼は壊滅的にモテない。

「つまりあの人は俺がフシギバナを倒してるのを見てたんだな？」

回想から意識を戻して若干不機嫌になつた恭一が確認する。

「フシギバナではなくアルター・トウムドラゴンじゃが、ハイデマリー姉様がお主の活躍を見ておつたのは確かじやな。見ている人は見ているということじや」

どうせなら可憐で可愛い女の子に見ていてほしかつた、と恭一は思つた。心底思つた。彼は壊滅的に女運が悪い。

テオはその縦ロールの髪を手で整えながら言つ。

「ハイデマリー姉様は常々自分より強い男でなければ結婚相手には認めぬとおつしやつていてな

「いねえだろ」

間髪いれず恭一が突つ込む。ハイデマリーは格闘大会において他の追随を許さぬぶつちぎりの実力で優勝していた。東西南北様々な国から強者が集まる格闘大会であれなのだから、ハイデマリーの身分に釣り合うような王侯貴族でそのような猛者がいるとは思えない。

「それゆえに姉様は今まで結婚を見送つていらつしやつたのじや」

そう言つうと、テオはそれはそれはもう可愛らしい顔で笑い、恭一の肩を掴んだ。

「キヨウイチ。お主は姉様の初恋の人じや。まさか純情な乙女心を踏みにじる真似はしまいな？」

肩を掴む手が万力のよつに恭一の肩を掴む。恭一は痛みに顔を引きつらせた。

「テオ、俺は姫さんとは身分が釣り合わない」

「お主なら問題ない！ むしろお主が婿に来てくれるといつのなら、我ら王族は諸手を上げて歓迎しようぜ」

「俺が大問題だ！」

痛みに耐えかねた恭一がテオの手をはねのけ、距離を取った。

「俺よりイケメンの男と結婚しろ！？ 「冗談言つなー」

「姉様は女じや！」

「つかお前ら王族性癖が倒錯しそぎなんだよー 王子が女装して王女が男装してお前ら何がしたいんだ！」

「それは今は関係なかろつ！ お主以外に誰が姉様を倒せるといつのじや！」

「倒してどうする！ いい加減にしないとお前の縦ロールむしって俺の『レクション』にすんぞ！」

「お主、我らを敵に回したらどうなるか分かつてあるのかー？」

「分かんねえなあ。その時はこの国から出ていくだけだ！ 俺はどこでも暮らしていくる！」

「マ、マスター落ち着いてください」

ルツツがオロオロとして間にに入る。

「とにかく！ お前が何と言おうと俺は断るつもりだからな！ 今

日はもう『帰れ』！」

「待つのじや、キヨウイー！」

テオの言葉は恭一の強制帰還魔法によりかき消された。

静かになつた店内で、恭一は鼻息荒くカウンター内の椅子に座つた。

「つたく。冗談じやない！」

「マスター……」

常にはい恭一の様子に、ルツツはどう声をかけるべきか迷つた。

ハイデマリーのことを聞いたクルトが冷やかしに来て恭一のハツ
当たりを一身に受けるのはその数分後である。

さて、強硬な態度でテオを追い出した恭一だつたが、翌日から彼は非常に悩むことになった。

毎日のようにハイデマリーが店を訪れるようになったのである。といつても、ストーカーのような粘着性もなければ押しつけがない強引さもない。あえて言うなら礼儀正しく爽やかに図々しい。

「キヨウイチ殿。北方から届いた珍しい鉱石を持ってきましたのですが、一緒にお話でもいかがですか？」

「西方の珍しい書物です。よろしければ読んで感想を聞かせてください」

「馬で半日ほど行ったところに、美しい湖があるので。よろしくねば来週、一緒に遠乗りに出かけましょう」

あくまで爽やかに恭一の好むツボを抑え、あくまでも礼儀正しい。がたいが良いため多少圧迫感はあるものの、必要以上に近付いてこないし、恭一が嫌がれば無理強いは決してしない。

テオのように自身のバックボーンをちらつかせたり脅してくるようならば恭一も反発しただろうが、ハイデマリーが礼儀正しい客人として来たならば話は別だ。そして生物学上彼女は女でもある。しかも思いっきり好意を示されているので、ややお人好しの気がある恭一は素氣無く扱うのに抵抗があつた。たまに向けられる熱っぽい視線には辟易してはいたが、ハイデマリーのせいではないが、条件反射的に鳥肌が立つのだ。

ハイデマリーは友達付き合いをするならば、非常にいい人間だつた。武術馬鹿だとばかり思っていた恭一の予想を裏切り、教養深く話術も巧み。礼儀正しく身のこなしも華麗だ。性格もさっぱりとしていて明るい。さらに王族としての教養はある癖に普段は庶民的嗜

好。かなりイケメンなので微妙に反発心が湧きそうになるが、相手が女性だと思えば多少はましになる。

そう。恭一は彼女のことを嫌いではなかつた。むしろハイデマリーは好感が持てるタイプだつた。数週間の交流を経て、ハイデマリーからの手紙をちょっぴり喜んでしまう程度にはハイデマリーのこと好きになつていた。あくまでも友人として、だが。

といつても、このまま押されていけばなし崩しで恭一がお婿入りする日も近いだろう。

「マスター、マスター、しつかりしてください！ ハイデマリー姫は戦いになれば敵を血祭りに上げる人ですよー？」 相手のあばら骨折つて高笑いする人ですよー？

ハイデマリーからの手紙を楽しそうに読む恭一に、ルツツが半泣きで訴える。彼は恭一が留守にしている間ハイデマリーとテオからダブルでプレッシャーを受けていたため、彼らに対する恐怖がひとつあるのである。

「でも普段はいい奴だしなあ」

恭一は困ったように頬をかいだ。

ハイデマリーの凶暴な面を恭一とて忘れたわけでもないが、ここ数週間はただただ誠実な好意を向けられているばかりなのでついつゝい絆されそうになつっていた。というか、かなり絆されている。

未だに結婚相手としてはノーサンキューな恭一ではあるが、そのうちハイデマリーの気持ちが冷めて友人として付き合つていけないかなーなどと甘い考えを抱いていた。恋する乙女からするとひどい態度であるが、色々と経験の少ない恭一はその辺には気付いていない。

手紙を読みつつのんびりとお茶を飲んでいると、店の入り口のベルが鳴つた。

「キョウイチ殿」

「マリーか」

現れたハイデマリーに恭一は笑顔を見せる。ハイデマリーも満面の笑みを浮かべた。あくまでも爽やか肉体派好青年にしか見えない顔だったが。

と、

「邪魔をするぞ！」

どすどすと足音を響かせて店にやつてきたのは腕っこきの冒険者である沃尔夫だ。彼はしばしば恭一を冒険者にしようと誘いにやつてくる。ここ数週間ほどはギルドからの依頼のため遠方へ行っており、顔を見せていなかつたのだが、どうやら帰ってきたようだ。

「俺様と組むつもりになつたか、キヨ」

言いかけて、ハイデマリーの存在に気付いた沃尔夫はその瞬間、雷に打たれたかのような表情で固まつた。字幕をつけるならば、「ウオーター！」であろう。姫川亜弓の方の。

不審な態度の沃尔夫に恭一が声をかけるよりも早く、彼は恭一ではなくハイデマリーに近付き、その手を取つた。

「何と美しい……！ 貴女のお名前を伺つてもよろしいか」

恭一は手に持つていたティーカップを取り落とした。中のお茶がこぼれたのでルツツが慌てて布巾を持つてくる。

ハイデマリーは沃尔夫の唐突な申し出に目を虹黒させながらも、恭一の知己と悟り、礼儀正しく笑顔で挨拶をした。

「ハイデマリーと申します。失礼ですが、あなたは？」

「沃尔夫・アイゼンシュタットと申します」

その名を聞いて今度はティーカップを片付けようとしていたルツがカップを落とした。

「ヴォ、ヴォ、ヴォルフさんって貴族だつたんですか！？」

驚愕で目を丸くしてルツが言つ。アイゼンシュタットという名字はこの国には一つしかない。アイゼンシュタット公爵家だ。まさか世界をまたにかけて活躍する冒険者が高位の貴族の坊っちゃんだ

とは誰も思つまい。

しかしヴォルフにはルツィの声も届いていなかつたらしい。

「ハイデマリー 嬢、あなたに實に似つかわしい名前だ。大輪の薔薇

のようく氣高く美しい貴婦人」

やたらと情熱的にヴォルフがハイデマリーを口説き始めたのだつ

た。

恭一とルツィは固まつた。

青天の霹靂（後書き）

ハイデというのに貴婦人という意味があるとかないとか。つまりハイデマリーは貴婦人マリー。名は体をあらわす？

さて、石化がようやく解けた恭一は、ヴォルフがそういう趣味の人間かと誤解しかけたが、ハイデマリー嬢と呼んでいるということは女性だとはつきり認識しての言動だろうと気付いた。

とはいえ、ルツィと恭一は、目の前で繰り広げられる光景が見てはいけないもののような気がして目をそらした。性別的には間違つてないが、見た目的にはどちらも筋肉隆々の青年なのでアウトである。

「いや、その、私は……」

正面切って本気で口説かれたハイデマリーは顔を真っ赤にさせながら言葉を詰まらせた。今まで本音の透けて見えそうな貴族的な社交辞令や女性からの愛の告白はあつたものの、武に目覚めて体を鍛え始めてからは男性に告白されたことは彼女にとつて初めてのことだった。彼女が男とする挨拶と言えば、もっぱら戦闘前の挑発合戦であった。色々間違つている。

「キヨウイチ殿……」

助けを求めるようにハイデマリーが恭一へとすがるような視線を向ける。それに気付いた恭一は、頭をかくとヴォルフへと声をかけた。

「ヴォルフ、いきなりだとマリーも戸惑つてるだろ。手を離してやれ。つていうかどうこうつもりだ」「

いやほんとマジで、と言いたいのを恭一は堪えた。

夢食う虫も好き好きと言つが、色々突つ込みどころが多くぎる。

「この美しい貴婦人に愛をわざやいているだけだが?」

「あ、そう

堂々と胸を張つて言われてしまえばそれ以上言えない恭一である。人はこれをヘタレと呼ぶ。

しかしここで恭一を援護したのがルツィだ。

「ええと、つまりはハイデマリー様に一目惚れされたと？」

確認するように言うと、ヴォルフはそのワイルドな顔を少しばかり恥ずかしそうにそむけた。未だに手はハイデマリーの手を握つたままである。

「ああ」

「どこに一目惚れする要素があつたのだろう、と恭一達は思ったが、口には出さなかつた。さすがにハイデマリーに失礼だ。」

そこでようやく平静を取り戻したのであらうハイデマリーがヴォルフの手を振り落つた。

「わ、私は、キョウイチ殿をお慕いしている… この指輪が証拠だ！」

顔を真っ赤にしてヴォルフから離れたハイデマリーは、自身の指にはめられたヴァンダーリングを示した。

彼女にかけられた忌わしい呪いを解いたそれは、今なお彼女の指に燐然と輝いている。

ちなみにこの国では男性から贈られた指輪を身につけることは、大抵は恋人同士か将来を誓い合つた仲であることを示す。

「なんと！ すでに婚約しているということか！？」

ヴォルフが勘違いをして戦慄いた。

正確に言うならヴァンダーリングを鍊成したのはクルトだし、呪いを解く魔法をかけたのはアーデルベルトなので、恭一はこれっぽつも製作には関わっていない。

しかし恭一がいなかつたら鍊金釜破壊の謎も解けず、また聖水などの手配なども難しかつたであろうことは事実であり、かつハイデマリーが恭一のことを知るきっかけになつたものもある。

好きな人が関わつたものを身につけていたいというのは實に女性らしい乙女思考だ。

しかしヴォルフがそれで諦めるわけもない。というかヴォルフが言つたことは事實ではない。恭一は呆気に取られていたせいで反論できなかつたが。

「ならば、力づくで奪うのみ！ハイデマリー嬢をかけて勝負だ！」

腹の底から響くような声でヴォルフが言つ。

どうやって断るべきか、というかそもそも誤解を解くのが先だろうか、と恭一は迷いながらヴォルフを見た。

彼が口を開く前にハイデマリーがそれを制する。

「キヨウイチ殿が出るまでありますん」

そう言つと、どこか野獸を彷彿とさせる笑みを浮かべてヴォルフに言つ。

「私は私より弱い男を認めない。私を奪いたいと言つのならば力を示せ」

するとヴォルフもにやりと笑つた。

「ならばハイデマリー嬢、勝負！」

なんでもうなる！ という恭一のシッコリよりも早く、ヴォルフとハイデマリーの拳と拳がぶつかり合つた。その衝撃波で、壁に並んだ棚に陳列してある商品がバタバタと倒れた。目玉商品の人魚の涙（これ一つで庶民の家が一つ買える）が床に落下し、音もなく砕け散つた。恭一が声にならない悲鳴を上げる。

「店内でやるな馬鹿！『バトルフィールド展開』！」

途端に紫電が部屋の中を縦横無尽に駆け巡り、景色が変化した。恭一達四人は軽く半径一キロはありそうな半円の空間に立つていた。地面には青々とした草が生え、空は明るく澄み渡っている。恭一が創造し亜空間だ。ここでいくら大暴れしようとも現実世界には影響がない。

二人は全く違う場所に一瞬で移動したにも関わらず動じた様子はなく、ハイデマリーがバックステップで素早く後退すると、ヴォルフがそのまま踏み込んで一撃目を打ち込む。衝撃波で数メートル離れているはずのルツツの髪が揺れた。

「ぬるいわ！」

すっかり狂戦士の顔になつたハイデマリーはそのたくましい腕をクロスさせてヴォルフの拳を止めると、一気に腕をからめて体を引

き、体勢を崩したヴォルフの頭に強烈な頭突きを見舞つた。

「ゴスつと重い音が響く。」

「ぐおっ！」

ヴォルフは一瞬苦悶に顔をゆがませたが、

「まだまだ！」

すぐに体勢を整え、ハイデマリーに風を切る音の聞こえる強烈な蹴りを繰り出した。ハイデマリーはそれをいなしてヴォルフの腹に拳をめり込ませる。

「ははは、この程度で私に挑むとは笑わせる！」

ドガ、ボコ、メキ、と聞こえてはいけないような重い音が亜空間に響き、血しづきやら汗やらが飛び散る。いつかの格闘大会を彷彿とさせる、しかしそれよりも格段に激しい戦いだった。

「おい、一人とも止めろ！」

恭一が声を掛けるが、

「血がたぎる！」

「はははは！ 愉快だ、実に愉快だ！」

と、戦闘狂の一人にはまつたく聞こえていなにようである。

「どうしてこうなった……」

恭一は頭を抱えた。

女をめぐつて男同士が戦う話は聞いたことがあるが、女をめぐつて男女が戦うとはこれいかに。しかも男が求婚者で女は被求婚者である。

二人の様子を見ると、檻から解き放たれた野獣のように生き生きとしながら殴り合っている。顔だろうがボディだろうがお構いなし。服が破れていたりあちこちから血が滲んでいたりと二人ともかなり凄まじい様相になつてている。時折血しづきが恭一達のところにも飛んできた。

「マスター……僕氣絶していいですか」

「ああ、お前は何も見なかつた」

律義にお伺いを立ててから顔面蒼白のまま氣絶した押し掛け弟子

を支えると、恭一はそのまま彼を元の店へと送り返した。そのうちトニーが気付いてルツツをどこかに寝かさせてくれるだろう。後は目の前で高らかに笑いながら殴り合っている一人をどうするべきか、と恭一は遠い目をするのだった。

決闘（後書き）

やめて！ 私のために争わ……あれ？ といつ展開。

そして決着（前書き）

一部流血表現がありますので、苦手な方は最初の方を飛ばしちゃつてください。

そして決着

さて、魔法を使えば強制的に一人を止めることもできたはずだが、恭一はそれをしなかつた。何故かといえば経験則だ。下手にここで止めると大変なことになる。主に恭一が。

これはもう一人の気が済むまでやらせて決着がつくまで待つしかないだろう、とそこかしこに地面を割つてクレーターを作つてゐる二人を見守ることにした。言つておくと、恭一の作った亜空間の地面は簡単に割れたりクレーターが出来たりするほど柔くない。

片や世界中で引っ張りだこの冒険者、片や世界的な格闘大会でぶつちぎり優勝するほどの猛者。規格外の二人の実力は拮抗してゐた。田をきらつかせて地面を割つてゐるハイデマリーには、恭一のなんだ爽やかで礼儀正しく穏やかという人物像を完膚なきまで破壊するに十分だった。

ああ、うん、やっぱりないな、と恭一は内心で一人ごちる。もし結婚などといふことになれば、カカア天下どじろの話ではなさそうだ。夫婦げんかで死ねる。

そしてしばしの時が流れ、戦いにもよつやく終わりが見えてきた。

「ぐつ……はつ……」

ヴォルフが苦しげに膝をつぐ。口の端からは血が流れ、何本か骨も折れているようだ。服には血がにじんでいる。

「どうやら勝負あつたようだな」

高圧的にハイデマリーが言つ。彼女の拳はヴォルフの血で染まつていた。

「まだ……まだだ……！」

すでに限界が近いであろうヴォルフは、それでも諦めずに立ちあがろうとする。

ハイデマリーは無情にもヴォルフの体を蹴り飛ばした。なすすべ

もなくヴォルフは吹っ飛び。

「マリー！」

さすがに恭一が咎めるように声をかける。

ハイデマリーは少しだけ恭一に視線を向けたが、すぐにヴォルフへと視線を戻した。

ヴォルフは血反吐を吐きながらも再び体を起そうとしていた。

「ヴォルフももう止めろ！ 勝負はついてるだろ！？」

痛いのが嫌いな恭一にとって、他人が怪我をする様子も見ているだけで痛くて嫌だ。

しかし恭一の制止もヴォルフには通じない。

「諦める……わけには……いかん！」

やおら咆哮を上げたかと思うと、再びヴォルフはハイデマリーに襲いかかった。

振りかぶったヴォルフの拳が自然体で立つハイデマリーへと近づく。

が、何故かハイデマリーが動く気配はない。

そしてヴォルフの拳がハイデマリーに届くほんの数センチ手前で止まつた。

「ヴォルフ……？」

恭一が声をかけるが、ヴォルフは無言のまま動かない。

眉を寄せて恭一がヴォルフに近寄つて見ると、彼は立つたまま気絶していた。

お前はどうこの少年漫画の登場人物だ！ と恭一は心中で突っ込んだことは言つまでもない。

さて、勝負がついたということで恭一はハイデマリーとヴォルフの治療をした。もちろん魔法である。彼に医療知識はない。店に戻つてルツツが再び卒倒しても困るので、血も清めて服も元に戻しておいた。猫人族のルツツは鼻が利くため、そういう臭いにも敏感なのである。普段ならば平気なのだが、今はタイミングが悪い。

怪我を完治させてしばらく経つと、地面に寝かされたままのヴォルフが目を覚ました。恭一とハイデマリーがヴォルフの顔を覗き込む。

「……負けたのか」

ゆっくりと身を起したヴォルフは無念さをこじませて呟く。

「いや、お前は頑張ったよ」

つていうか頑張りすぎだよ、氣絶する直前まで動くつてなんだよ、お前どこのバトル漫画出身だよ、と恭一は思ったが口には出さなかつた。異世界では通じない突つ込みだ。

「ハイデマリー嬢」

ヴォルフがハイデマリーに顔を向ける。ハイデマリーは緊張した面持ちでヴォルフと視線を合わせた。

「大変お強い。ますます惚れ直しました」

お前はマゾか、と口に出そうになつた恭一だつたが、すんでのとこりで飲み込んだ。戦闘狂の考えに共感するのは恭一には難しそうだ。

ついでに言うなら戦闘中と戦闘前後のテンションの差にもついていけない。一重人格かと疑いたくなるくらいだ。特にハイデマリーは。

さて、そんな熱い告白を受けたハイデマリーといえば、こちらもまた戦闘中のバーサーカーモードとは打つて変わつて乙女らしく顔を赤らめている。熱烈な告白に乙女心が揺れているようだ。重ねて言うと揺れているのは乙女心である。

「マリー、俺が言うのもなんだがヴォルフはいい奴だぞ」

恭一が言えば、ハイデマリーは一瞬悲しげな表情を浮かべたが、やがてすっくと立ちあがつた。

「私より強くならねば、認めるつもりはない」

ヴォルフがぐつと拳を握る。

「だが」

そう言うと、ハイデマリーは不敵に笑つた。

「再び挑戦するつもりがあるなら、いくらでも待ってやるつ
何かを吹つ切れたような、清々しい顔だった。

さて、その後元の場所に帰つた三人だが、ハイデマリーは意
外なことを言つた。

「私はこれから修行の旅に出ようと思います」

雄々しく笑う彼女に、恭一は驚いて目を丸くした。

「ヴォルフには勝つただろ?」

するとハイデマリーは首を振る。

「しかし無傷とは行かなかつた。世界は広い。

私より強い人間ももつといふでしよう

「ならばその修行、俺様も同行しよう

ヴォルフが言つ。

「好きにしろ」

ハイデマリーはぶつきらぼうに言つが、その言葉はどうか柔らか
い響きがあつた。

国を担うはずの貴族の子息と王女が修行の旅に出てもいいものな
のかと内心で首をかしげつつ、恭一は自商品の中からいくつかのも
のをピックアップした。

「餞別だ。持つて行け」

そう言つて渡したのは強力な傷薬。背熱帶の奥地で取れる貴重な
傷薬で、恭一の魔力も付加してあるため非常に強力なものだ。

「ああ、ありがたく」

「感謝します、キヨウイチ殿」

受け取つた一人は、力強い足取りで店から出て行つたのだった。

その姿はまるで、今から戦場に向かう一人の戦士のようだった。
恭一は深く考へないようにした。

それからヴォルフとハイデマリーの修行の旅が始まったのだが、深くは語らないでおこう。

ただ言えるとすれば、過酷な修行によつて時として訪れる命の危機を力を合わせて乗り越えていった二人の間には確かに絆が芽生え、恋へと発展していったということぐらいなものだ。

彼らが修行の旅に出てから半年少しが過ぎて、二人が恋人同士になつたという手紙が恭一の元に届いた。少しだけ複雑な気分になつた恭一だったが、素直に祝福のメッセージを送つた。

それから時折ヴォルフやハイデマリーから手紙が届いたが、どうやら二人は上手くいつてゐるようだつた。

そして一年以上時が過ぎ、ヴォルフ達が王都へ帰つてくることになつた。

素材屋の店のベルが鳴る。

「らつしや……ヴォルフか！ 久しづりだな！」

恭一は驚いて立ちあがる。

久しぶりに会つた友人はいつそ憎らしくらいに以前よりもさらに精悍さと渋さが増し、いい男っぷりに磨きがかかっていた。どんな激しい修行をしてきたのか、傷跡もたくさん増えている。

「おお！ 久しいな。俺様に会えなくてさびしかつたか？」

「んなわけねえだろ」

恭一は顔をしかめて言い返す。そしてふと氣付いて首を傾げた。

「ヴォルフ、その人は……？」

恭一の視線の先には、大層美しい女性がいた。

プラチナブロンドの豊かな髪が波打ち、多少日焼けはしているものの引き締まつた顔立ちは非常に整つており、高貴な美しさがあった。また、すらりと伸びた肢体とシンプルでやや緩いデザインのドレスが相まって、街を歩けば誰もが振り返るであろう美しさがある。一言で表現するなら、べらぼうな美人だつた。

恭一に視線を向けられた女性はたおやかに微笑んだ。

「キヨウイチ殿、お久しぶりです。ハイデマリーです」

「…………マリー？」

恭一は我が目を疑つた。

確かに声はハイデマリーに似ている。彼が覚えているものよりも少し高いが。

「せつかくの美しい髪だから伸ばしてみると俺が言つてな」

ヴォルフは誇らしげに笑う。

「お腹に子供がいるのが分かつたので、激しい運動を控えていたらすっかり筋肉が落ちてしまいまして」

激しい爆弾発言を次から次へと投下され、恭一は頭がショート寸前になつていた。

普通筋肉が衰えると脂肪になり変わるのがそれ以前にあの筋骨隆々の男にしか見えなかつたのがどうしてこんな美女なるのか。

「つていうか、子供？」

「ああ」

「そうなんです。順番は逆になりましたが、落ち着いたし結婚式も挙げようど

照れ照れとしながら二人が応える。

「ハイデマリー姉様が帰つてきたとは真か！？」

「テオ様！ お待ちください！」

「アーデルベルト！ 僕まで巻き込むんな！」

どこで情報を聞きつけてきたのか、テオが転げこむように店内へと駆けこんできた。それを追いかけてアーデルベルトと、彼に連れ

てこられたクルトも一緒だ。

そして店内になだれ込んできた三人は、ヴォルフとハイデマリーを見て目が点になった。

さらにその騒ぎを察してルツィヤトニーも掃除から戻ってきた。

彼らはひとしきりハイデマリーの変貌に驚いた後、妊娠という事実を知つて祝いの言葉をひとしきり彼らに送つたのだった。

「ならば結婚式を上げましょうぞ！ 姉様の結婚式です。盛大に国民で祝いましょう！」

興奮したテオが嬉しげに言つ。恥ずかしそうに笑うハイデマリーは頬に手を当てる。彼女の指には既にヴァンダーリングはなく、代わりにヴォルフの指にあるものと同じ指輪がはめられていた。

「ハイデマリー様はすっごくお美しくなられましたね～」

「女性って変わるんですね……」

にこにこと笑うトニーとは対照的に、ルツィは人体の神秘に遠い目をしていた。アーテルベルトはうれし泣きしていた。

「キヨーチ、惜しいことしたな？」

クルトが意地悪くニヤニヤしながら声をかけてきたので、恭一は無言でクルトの髪が七色アフロになる魔法をかけておいたのだった。

逃がした魚は大きいということを知つた恭一は、一人の結婚祝いを盛大にすることを約束しつつ、その日の夜は枕をぬらすこととなつた。

そして決着（後書き）

これにて完結です。
「J愛読、ありがとうございました！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3148v/>

彼は素材屋2 ~ヴァンダーリング騒動~

2011年10月22日03時17分発行